

# 「災害のあと 震災のまえ」 その1

當眞嗣朗

## 「災害のあと 震災のまえ」

その1

商いに行くぞ、とツネコ姉さんが言つた。この近辺に

ある取引先の家を直接訪問して、注文を受けた分の餡を

配達し、代金を回収するのだ。今日は配達先が少ない。

だからすぐに帰つてくることができる。彼女は、ノボルを安心させるように言つた。彼は姉の商いに着いていくことが、あまり好きではなかつた。家で好きな本を読んでいるほうが、ずっと愉しいのだ。しかし姉は、弟の教育に熱心だった。将来、【飴売り】として独立するために、なるべく多くのスキルを身につけさせようと考えているのだ。

彼女はすでに出掛ける支度を終えて、準備にもたついている弟を玄関口で待つていた。姉の身体は柔道の選手のように大きい。そして強靭だ。販売用の飴は、ちいさ

な袋に小分けにされて、おおきなリュックサックに詰め込めるだけ詰め込んでいる。荷物を背負うと、登山をする男のようで、とても女には見えない。しかし彼女はかつて、絶大な人気を誇る美人歌手だつた。

「懐中電灯を持て」。ツネコ姉さんが言つた。「道は暗いぞ。十に満たない子共が歩くには暗すぎる」。確かにこの近辺の住宅街は、田舎道だから、夜は本当に暗い。日没のあとは一帯が濃厚な闇につつまれる。災害が発生する以前、街路は無数の外灯によつて照らされ、住宅や店舗から洩れる明かりは眩く、夜を光で彩つっていたという。しかし現在は、まるでそれが空想の世界の情景だつたかのように、夜がその存在感を取り戻している。

「ツネコ姉さん」。ノボルは血の繋がらない姉の名を呼んだ。「昔、夜が今よりもずっと明るかった頃、みんなどのよう夜を過ごしていたの？」

姉はその素朴な質問に表情を曇らせた。無理もない、と彼は思う。同じ質問を、これまで何度もくりかえしてきたからだ。答える側の立場とすれば、すこし面倒臭いかもしれない。しかし彼は、その答えに一度として満足したことがなかつたのだ。例えば、姉は、「みんな踊つていた。狂つたみたいに踊つていた」と、答える。ノボルは、その情景をうまく想像することができない。また、「酒を飲んで笑つっていた」などと答えられても、それは同様だ。姉の語る旧世界の情景は、現在とはあまりにも懸け離れ過ぎていて、そこに想像力がはいりこむ余地が残されていないのだ。

ツネコ姉さんは弟をじつと見つめ、半ば義務のようなく調で、言う。

「本に書いてある通りの生活をしていたんだ」

ノボルは考える。姉の書斎には旧世界の書物がたくさん

んあつた。その中でも文学作品は蔵書の大半を占めていた。外国文学も充実していたが、日本文学もそれに劣らず揃つていた。その日本文学で描写される世界は、大半が平穏で完全武装された長閑な世界観だつた。その中で人々は恋愛や仕事、家庭や老い等で悩み、主人公たちはそれぞれに思考のギアを変えていくのだった。彼はそれらを単なる空想小説としてしか読めなかつた。災害後の世界しか知らない彼にとって、現実世界というのは、食料が乏しく、エネルギーが厳しく制限され、常に他者による暴力に付きまとわれ、厳しさと不幸が常態化している、そんなものだつた。だから「本に書いてある通りの生活」を現実の問題として、うまく想像することができないのだ。もし、本当に、そんな豊かな生活がこの世界に存在するのなら、例えそこがどんな問題を孕んでいるにせよ、そんな世界で暮らしたほうが得なのではないだろうか？もちろんその気持ちを姉に伝えることは出来

ない。

「武器は、持つ？」。ノボルは玄関先で靴を履きながら、靴箱の脇に立てかけられた自動小銃を指差した。それはまるで靴べらのように平凡な趣きで、そこにあつた。

「当然だ」。姉は言つた。死にたくないだろう、と。それから続けて、「俺がいるから、何かあつたら守つてやる。しかし守れない場合も当然あるだろう。その時はお前が敵を討て」と、言つた。

ツネコ姉さんが言う「敵」とは、【餌泥棒】のことだ。餌の価値が極度なまでに高まつた現在、餌は生きていくうえで必要不可欠なものになつた。そのため闇の餌が出回り、正規品の餌が配達の最中に強奪されて闇市場に流れれるという事例があつた。自ずと【餌売り】は自衛を迫られた。もちろんそのような事例は頻繁にあるわけではない。ノボルだって、これまでに【餌泥棒】に遭遇した

ことはほとんどない。稀に出会つても、ツネコ姉さんが撃退してくれた。彼女は武術を心得ていて、容易に被害に遭うことはないのだ。しかし、彼には自らの身を守る武器が必要だつた。例え姉を信頼していたとしても。

「お前はヒトを殺せるか？」。姉が弟に問い合わせを投げる。ノボルはその言葉を受けるたびに、「判らない」と、簡潔に答えて小首を傾げた。「敵は討たねばならない。お前が討たなければ、相手がお前を討つだろう。しかし覚えておくんだな。敵の後ろには、たくさんの人間がいる。大勢の人間たちが、その敵を心から愛している。それぞれに固有の人生がある。お前が敵を討つとき、それはそれらの人生を破壊するときなんだよ。俺だって、出来ればそんなこと、したくない」

ノボルは自動小銃を抱えて、家を出た。その重量は子供にとつて酷だ。弾丸は充分に装填されている。決して

扱いに慣れているわけではない。けれど、これまでに何度も練習をしたから、実際に発砲することは可能だ。でもそれと実際に敵を討つことは異なった種類の問題だ、と彼は考える。もしも討つべき敵が目の前に現れたら、どのように対処するべきか。折に触れて迷う。災害時、大勢の人命が理不尽な形で奪われたという。【飴泥棒】だって、その圧倒的大災害を幸運にも生き延びた生還者たちなのだ。その命を、ぼくは奪えるのだろうか？ ノボルは自らの思考の奥を覗き込んで嘆息した後、あまり深刻にならないことだ、と考えを改めた。しかし銃器が身体に伝える現実的な重みが、彼に冷たい事実を突きつけた。

自宅を出た後、二人は暗闇の漂う夜道を配達先へと向かって進んだ。そこは海辺に近い。一定数の住宅が集つて小振りな集落を形成している。旧世界で見られたよう

な濃密な近所付き合いはない。だから煩わしい地域内の問題は少ない。ツネコ姉さんはそれを「寂しい」と表現する。そして同時に「決して間違ってはいない」とも語る。重要なのは、互いの足を引っ張らないで前向きに前進することなのだ。旧世界では、「出る杭は打たれる」や

「寄らば大樹の影」などの言葉があり、共同体意識が悪い意味で地元の住民たちに利用されたという。結局、自分の足で立つことさ、と姉は言う。そこは山にも面している。だからノボルの家は他の家に比べて少し高い位置に建っている。視線を眼下へと向ければ、集落の一帯を見渡すことができる。新しい集落だ。昔からこの地に住んでいる者は極めて少数で、大多数の住人が災害後に移住してきた者たちだ。ツネコ姉さんは前者となる。日が高い内は、広大な海原を望むことが可能だ。しかし一旦日が落ちれば、暗闇が勢いを増す。外灯の類いはない。店も開いていない。集落は沈黙に包まれる。人々は家で

じつとしている。寝ているわけではない。彼らは暗闇のなかで、ラジオを聴いているのだ。

「ぼくたちはラジオを聴かなくていいの？」ノボルは傍らで寡黙に歩を進めていたツネコ姉さんに素朴な問いを投げた。災害を生き延びた大勢の人間が、ガバメントのラジオ放送に夢中になつていていた。そこから発信される様々な情報が、人々を魅了している。それはまるで宗教のように機能し、災害で混乱した多くの人心を掌握している。以前、ノボルも興味本位で、ラジオの周波数をそこへ合わせたことがある。ラジオやテレビ等の受信機の類いは姉の厳しい管理下にあり、彼が簡単に持ち出せるものではない。しかし姉が不在の晩、こつそりと保管室から持ち出したのだ。災害前に製造されたという安価のポータブルラジオの扱いは実に楽だった。スイッチを押し、ダイアルを回して周波数を合わせれば、それで意中

の放送に辿り着くことができた。幸いにも【干渉波】は吹いていなかつた。この時代、電波を発信しているのがガバメントだけだつたから、それらの行為は容易に行うことができた。スピーカーから細かなノイズと共に聞こえてくるヒトの声は、彼を大いに戸惑わせた。何故なら、それらはまるでノボルの知らない言語で話されていたからだ。ツネコ姉さんの書斎には、英語で記された本が無数にあつた。だから彼は多少、英語を解することができた。しかしその晩、ノボルが耳にした言葉は、日本語でも英語でもなかつた。もちろんこの世界には多くの民族があり、それぞれに固有の言語がある。だから彼の知らない異国の言葉があるのは至極当然だ。しかし雑音を伴つて吐き出されるその声は、自分と同じ人類が意思の疎通のために用いている言語とは思えなかつた。发声の仕方が独特で、節回しが印象的だ。短い単語をすばやく繰り返し、その後で長い単語を静かに語る。そこからノボ

ルが受けた印象は恐怖そのものだった。その奇妙な放送を人々は平然と受け容れ、黙々と聞き続いているのだ。

言葉の意味は判っているのだろうか？ 彼には理解できなかつた。しかし、それは災害後の人間の生活には欠くことのできない何かであるらしかつた。では何故、自分たちはそれを聴かないのだろうか？

その問いを受けた後、ツネコ姉さんが機嫌を害されたような表情になつた。そこには、不快な出来事を目にした後のような、心愉しくない苛立ちが存分に含まれていた。「あれは良くない」。姉は簡潔に自分の意見をクチにした。まるで誰かを一方的に非難するような口調だつた。しかしその言葉の裏側には、無力感を得た上での幾分の躊躇いが潜んでいるようにも思われた。「あれはガバメントの言葉だ。ヤツラの言うことを鵜呑みにするのは良くない。洗脳される。そうなると人間は魂を持つていかれない。

るんだよ。それは生きながらにして死んでいるのと同じだ』

「でも、大勢の人たちがそれに取り憑かれているよ」。ノボルは後に引かなかつた。素朴な疑問は、それが純粹さの故に容易には解消されない。心を動かす強い言葉が必要なのだ。実はそれこそが、弟が姉に抱く不満のひとつでもあつた。

「俺たちは違う」。ツネコ姉さんは断定的な口調で言つた。何故なら【飴売り】だからだ、と。「この仕事はガバメントの統治の範囲外にある。彼らがこの世界の新しい統治者である以上、これは言わば闇の仕事だ。これから先も、ヤツラが飴の売買を正式に許可することはないだろう。ヤツラは支配者だ。世界を支配する側の人間にとつては、支配される側の人間は無知であるのがいい。その分、容易に統制できるからだ。しかし俺たちは違う。誰かに支配されることを望まない。それに飴は順調に売れつづけ

ている。この世界には俺たちと同じように物事を考える人間が少なからずいる、ということだ。ガバメントにとつて、それは不都合だ。だから彼らは【飴売り】を規制の対象にしようとしている。しかし彼らの力は今のところラジオだけだ。幸いにもそれ以上の力は持っていない」ノボルは静かな内面で考える。この世界のどこかに、今より良い暮らしができる土地があるのなら、一度はそこへ行つてみたい、と。例えそこがガバメントであろうとも構わない。

ツネコ姉さんは堅く閉ざされた鉄製の玄関ドアの前に立ち、その傍らにあるブザーを取り決め通りに鳴らして、小さな一軒家の家主が出てくるのを待つた。しばらくしてドアの錠前が開錠される重い音がした。幾もの鍵を一つひとつ開けているのだ。それからドアが僅かな隙間、開けられ、防犯用のチエーンの向こう側から

注意深く女の顔が覗いた。歳を取りはじめた人間が持つ静けさに満ちた中年の女性だった。目尻や口元を這う無数の皺と白くなりはじめた髪の毛が、彼女のあまり幸福ではない半生を物語つているようだった。災害後の人間は、その多くがこのように幾分草臥れた表情をしている。

「【飴売り】です。注文の品、持つてきました」。そう言って証拠品を提示するように差し出すと、女性は警戒を解き、安堵したような笑みを口元に浮かべて、最後の施錠を外し、ドアを開いた。玄関口には自動小銃が立てかけられてあつた。

「間に合つて良かった」。その依頼主は言つた。「買い置きしていた在庫がもう残り少なかつたの。家の人们は飴をたくさん舐めるほうだから、充分な量を持つていないと心配なのよ。それに最近は【干渉波】が吹く日が増えたでしょう？　それだけガバメントも必死なんでしょう

うけれど。あれは頭痛の種になるから憂鬱でね。だから飴がないと不安で仕方がないのよ」

「それは良かった」。ツネコ姉さんは【飴売り】としての良識を示して頷いた。飴は一種の中毒性を持つ食べ物だつた。しかし現在、大半の人間がそれ無しでは生きていけない状態にある。だからこの仕事は人助けの側面が大きく、商売としての利益には欠けるのだ。だから良識がなければ続けられない。「でも、次回の配達には少々時間がかかるかもしれない。材料が不足しているんだ。飴の製造にはある特殊な粘液が必要になるんだが、その粘液を出す生物が現在、食料難に陥っている。最近はまともな食事にありついていならしい。だから当分、飴は不足すると思う」

「節約するしかないんでしようね。災害の前はなにもかもが潤沢にあつたけれど。でもそのとき、人々は飴を必要としなかつたわ」

「かつてイースター島で文明を築きあげていた人々は、モアイの建設のために木を乱伐した」。ツネコ姉さんが重い口調で言つた。「その結果、その島からすべての木が無くなつた。最後の木を切り倒す時、彼らは何を考えたと思う?」

代金の受け渡しを終えて、次回の配達の日取りを大まかに説明した後、ノボルはその家の家人よりお菓子を頂いた。重ねたビスケットの間に甘いチヨコレートが挟まれ、全体が緑色の糖蜜でコーティングされたお菓子だった。この辺りでは手にはいらないものだ、おそらくは高級品だろう、と姉と弟は思った。この時代を生きる多くのヒトがそうであるように、人々は質素な食生活を強いられているのだ。一口齧ると意外にやわらかく、最初に糖蜜のもつたりとした味わいがあり、次第にチヨコレートの甘さがクチのなかにひろがつた。ビスケットは適度

な糖分をふくんでやわらかく、噛めば噛むほどにこの世のものならざる味がひろがつていった。これまでに味わつたことのない濃厚な味わいだつた。この辺りで手には

いるお菓子といえば、擬似チョコと呼ばれる少量のカカ

オに化学調味料をたっぷりと混ぜたものばかりで、ノボルはそれを食べていておいしいと思ったことがない。ツネコ姉さんは、それは身体に悪い影響をおよぼすものだから、あまり食べてはいけない、と言う。しかし飴はかつてのような菓子類ではなく、生活必需品になつていたし、子供の欲しがる甘いものと言えば、擬似チョコしかなかつたのだ。その点はツネコ姉さんも承知していて、なかば諦めの顔で、ノボルが擬似チョコを食べることを許している。こういう世界になる前は、甘いものなんていっぱいあつたんだ、と姉は言う。ノボルはその世界を幼い頭で想像してみる。しかし災害の後に産まれた彼には、その様相をうまく思い浮かべることができなかつた。

だから初めて目にする高級品のお菓子を前に、彼は、嬉しいというよりも外国の珍しいフルーツをクチにしたような不思議な気持ちでいた。

「そのお菓子、どこで手にいれたんだ？」。ツネコ姉さんが眉間に皺を寄せ、承服しかねるというような声音で、家人に訊いた。「この辺りじや、絶対に手にはいらないものだろう？」。どうやら彼女は、ノボルのクチに正体の知れないものがはいることを嫌がつてゐるようだつた。しかしそれ以上に彼女を疑り深くしてゐるのは、ほとんど第六感と呼んでも良いような超神秘的な感覚のようだつた。

女はすこし困ったような素振りを見せた。【飴売り】が食べるのに神経質になるのは承知の上で、この件で根掘り葉掘り聞かれるのが嫌なようだつた。それでも女は言つた。「最近ね、妙な噂がながれているのよ。あまりお

おきな声では言えないんだけど。ガバメントがね、この海の向こう側に理想郷って呼ばれるものを築いていて、どうやらそこには選ばれた人間しか住めない決まりになつてゐるらしいの。それでね、この間、近所の知り合いがそこに招待されて行つてきたらしくつてね、そのお土産としてそのお菓子を頂いたのよ。ひとつじやなくて箱にいっおいもらつたの。ガバメントはその理想郷に住む人間の選別をおこなつているんだつて、言つていたわ。いつ震災が来るか判らないし、行けるなら行つてみたい気もするけれど」

つづく